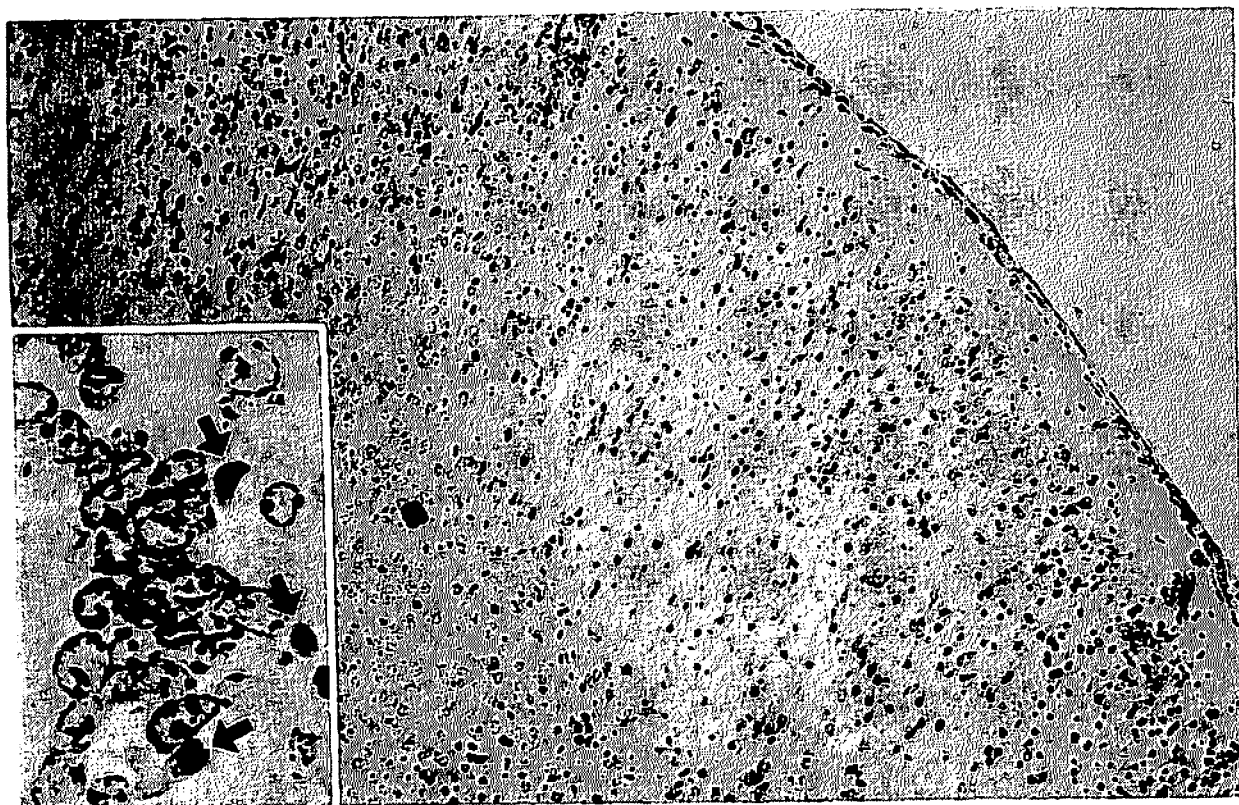


ハムスターのハシカ脳炎

日本生物科学研究所出題 第12回獣医病理学研修会標本 No.168



動物は乳のみハムスターで、生後3日目に左大脳半球に、ハシカウイルス豊島株感染ハムスターの脳10倍稀釈乳剤0.03 mlを接種し、4日後に放血によって殺し、その脳を調べた。この例は接種4日後に元気を失い、沈鬱となり、左旋回運動を示し、容易に横転し正常位に復することができず、後弓反張と四肢の痙攣が、しばしばみられた。

肉眼的所見：左大脳半球穹窿面のほぼ中央部に、ウイルス接種時にうけた出血を伴う注射針痕があった。大脳半球全体に微細な血点が多数みられた。消化管は空虚であった。

組織学的所見：この脳には、2つの異質な変化がみられた。その1つは終脳外套および脳幹領域における混合

膠質一中胚葉性活動型崩壊の発動である(図, H. & E., $\times 100$)。他の1つは、エベンディーム層、アンモン角、外套皮質および髄膜に好発する多核巨細胞形成、各種細胞における好酸性細胞質および核内封入体の出現(挿入図, H. & E., $\times 870$)、前記褪色変化巣と無関係に観察される神経実質の退行性変化、血管壁細胞の腫大増数、好中球の脳質内遊走と血管腔内集積、膠細胞の活性化、出血および水腫などの諸変化によって表現される炎症性変化であった。後段の諸変化はハシカウイルス感染と直接関係するものであり、前者はそれに対して2次的な意味を持つものであろう。従って病理組織学的には、“乏血性壊死を伴うハシカ脳-髄膜炎”と診断された。